

職場の同僚とのオンライン懇親会におけるほめと応答の発話連鎖

－共通の成員性を利用した認識的調和の形成－

福永 佳代子（大阪大学大学院生）

1. はじめに

本研究は、日本語母語話者の職場の同僚とのオンライン懇親会での雑談を取り上げ、ほめと応答の連鎖組織を会話分析の手法で分析を行う。同僚との懇親会は互いが理解を促進しようと働きかける場であり、相手をほめる行為が見られる。ほめられたときに日本語では「謙遜の原則」が優先され、ほめを受け入れるより、不同意を示す方が無標であるとされる（熊取谷,1989）。Schegloff (2007)によると、評価の隣接ペアの応答の産出では、一般的に同意が不同意より選好（preference）される。そのため、謙遜による不同意は同意が選好される規範に反する言語行動となる。又、ほめは評価の一種であり、評価をすることは同意・不同意だけでなく、対象についての知識を主張することだと言われている（Pomerantz,1984）。すなわち、参加者が共有する経験や知識を持っているのかどうかという認識性が発話を展開させているのであり（Heritage,2012）、参加者は誰が、何を、どのように、誰よりも知っているのかという問題についての合意「認識的調和（epistemic congruence）」の形成を指向していると言われる（Hayano,2011）。本研究はほめ手とほめの受け手の発話連鎖の相互行為に着目し、いかにして異なる立場から互いの知識を主張し、認識的調和を指向するのか観察する。

2. ほめとジレンマ

本研究のほめの定義は小玉（1993;1996）を基に、「話し手が聞き手或いは聞き手の家族やそれに類するものに関してよいと認める様々なもの或いはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的に或いは暗示的に、肯定的な評価を与える行為」とする。

会話分析でほめと応答に着目し、同意が選好されるというモデルから逸脱していると分析したのはPomerantz (1978)である。ほめに対する応答は不同意や拒絶が多く、ほとんどが同意、不同意の両極端ではなく、両方の特徴を持っていると述べている。又、これは、ほめてくれた感謝を示したいという欲求と、自画自賛を避けようとするジレンマがあるからであり、その解決策として「ほめの格下げ」と「対象のシフト」を挙げている。その他、張（2014）は同じ対象の別の側面にずらした「焦点ずらし」があると述べている。日本語のほめと応答の先行研究では、初対面や学生同士の二者会話をデータとするものが多く、同僚の実際の場面の自然会話をデータとし、成員カテゴリーの観点から一連の相互行為を分析したものは管見の限り見当たらない。本稿ではほめと応答の発話連鎖において共通の成員性（串田,2001）が利用され、ほめの受け手がジレンマに対処する行為に焦点を当てて分析する。

3. データと分析方法

データの分析に使用したのは、職場の同僚とのオンライン懇親会での多人数の雑談（約120

分)の録音及びその文字化資料である。録音データは、会話参加者のうちの一人が録音した。懇親会は職場の同じチームの女性5人と男性1人の親睦を深め業績につなげるために行われた。メンバーは人事に関わる上下関係はなく、社内の知識と経験を共有している。録音の文字化資料から、ほめと応答の発話連鎖を話題ごとに抽出し、参加者が相互行為に利用している成員性を分析した。「成員性」とはSacksに由来し、先生、会社員、女性といった人の種類を表す言葉、或いはそれによって表される概念である。人は相互行為の中で動的に何らかの成員カテゴリーを特定の人間に適用する「カテゴリー化 (Sacks,1972)」を行い、社会的、規範的秩序を維持している。本稿では、ほめの受け手が、ほめ手との共通の成員性を利用し、ほめの焦点を自分から「われわれ」に広げ、ほめを回避する断片を取り上げる。

4. 分析

まず、参加者Mを親としてカテゴリー化する行為を取り上げる。断片1は、懇親会当日の過ごし方を話している。参加者はI以外は女性である。04行目でMは「子供」という言葉で母親としての行為を報告している。18Mの「おやすみ」は子供が休むことで、親としての視点の発話であることが参加者に理解され、21Sに表れている。Sは10行目でMの子の習い事についての知識を主張し、21行目でMの子の習い事について「親もしないといけない」とMを一人の個人としてでなく、「親」として扱い、18Mの「しんどい」状況に寄り添っている。25Mは「旦那」という言葉で「家族」の一員として発話している。25Mの自己卑下に対し、27Yは「すごい」とゆっくりと発話し、21Sの内容を踏まえてMをほめてい。27Yのほめに対して28Mでは親として子供との練習ができていないと不同意を示している。この断片1のほめと応答の続きの雑談が断片2である。

【断片1 (習い事)】

1	Y: 何してたんですか??
2	T: だれ?
3	Y: 皆さん.
4	M: (今日)? (1.3)子供の習い事行って、スーパー行っただけ.hhhhh
5	(2.0)
6	S: 何の習い事?
7	M: IA ¹ 教室って [って()教室.
8	S: [でた!
9	I: >なにそれなにそれ<?
10	S: カードとかでしょ?
11	M: うん, [そう
12	Y: [え:: (13-17行省略)
18	M: スイミングは,hh,スイミングは、私が(.)しんどいからおやすみ¥hhhh
19	Y: へ:::
20	I: ふん
21	S: それ、親もせなあかんでしょ?家,家で?
22	M: うん:
23	Y: へ:::
24	I: へ:::
25	M: [もう旦那にまかせっき[り
26	S: [hhhh
27	Y: ↑<すごい>ですね::
28	M: 全然できてない。
29	Y: hhhh

断片2はMが同じように子育て中であるTに1行目で質問をし、話題をそらしている。断片2の2,4Tは「連れてって」という言葉で親としての行為を伝え、6Tで接続詞「で」でつなぎ、親カテゴリーを継承している。6Tの発話に重なるようにして7Mは高い音調、速いスピードで、「動物園行った」と6Tの言葉を繰り返す、語尾を上げて確認要求をしている。Tが11行目で情報を付け加えると、Mは14行目で「毎週?」と言言葉を繰り返す、聞き返している。この7,14Mは、それまでの断片1の28Mの親として「全然できていない」と考えるMの驚きを示されている。15行目からは、スクリプトでは省略しているが、Yも毎週JNO²に行っていると主張する。Mが20行目で「動物園毎週ですか、すご!」とほめるが、20MのほめにTは応答せ

¹ IA は教室名。 ² JNO は地名。

ず、23行目からは動物園に行った後JNOで何をするかという話題になっている。20Mで回避されていたほめをMは再度49,51Mで主張し、修復している。51Mのほめは断片1で親としてほめられたMが同じ母親であるTへの質問(断片2の1M)の応答6,11Tへのほめであり、「親」カテゴリーが継承されている。

54Tのほめの回避は、「黒くなってきた」と毎週行った結果の表面的な外見に焦点をずらしている。Mは56,57行目で速いスピードで同調を示し、59行目でその理由を「日傘さしてる人」とT個人ではなく全体を指す言葉で一般化している。60Tは子供を連れて行くことを優先した結果の側面を冗談として発言し、61Y,62M,63Iで笑いが起きている。

断片2の後はTとYが中心に会話を展開し、断片3に入る。断片3は、141,142Yの同僚としてのTについての知識の主張から始まる。149,150行目でIやSが、笑いや相槌で参与すると、Tが151行目で同僚として共有する知識を利用している。146Yでは断片2で話題になったTの動物園に行く頻度が多いことを強調している。そこでMが152行目で146Yの発話を言い換え、Yと同じ感覚であることを表してほめる。152Mのほめは断片2の51,53MのTを親としてカテゴリー化したほめと同様の内容の繰り返しである。155Tの回避は142Yの同僚のカテゴリーを継承し、発話参与者全員の共有する知識に基づく発話である。

この155Tの回避の仕方は、対象のシフト(Pomerantz,1978)と似ているが、対象のシフトは自分以外に対象をずらすのに対し、155Tは自分も含めた同僚である発話参与者全員を対象とする成員カテゴリーを利用している点異なる。Stokoe(2012)は特定の個人についての質問を、カテゴリー化の返答により、特定から一般へと移動する相互行為を指摘している。155Tも参与者の知識を利用して会社員としてカテゴリー化し、同じ同僚としてふるまっている。ほめを受け入れ

【断片2 (動物園)】

1 M: T何してましたか?
 2 T: ¥え¥hずっと一緒やけど,(,)スイミング連れてって::,
 3 M: うん
 4 T: () 教室みたいなん連れてって::,
 5 M: ふん
 6 T: で:,動物園行ってた.h[hh
 7 M: ↑>[動物園行った?<
 8 S: [へ::
 9 M: え:::
 10 Y: その動物(園)JNOですか?
 11 T: え?JNO (0.5) 毎週行ってんねん,(,)曜日[かれこれ.
 12 Y: [え?
 13 I: あ[:
 14 M: [え?毎週?
 (15-48行省略)
 49 M: いや,(,)い↑いですね.
 50 Y: うん.
 51 M: 動物園まいしゅうとかやバいですね.
 52 Y: ↑体力ある::!
 53 M: え:::,すご.
 54 T: だんだん黒くなってきた.
 55 I: [hhhhh.hh
 56 M: [hhhhhえ,それはまちがいない,
 57 それはなる>なるなる<.
 58 Y: へ:::,そうなんや::=
 59 M: =動物園で日傘さしてる人あんまりみ::ひん.hhh.h
 60 T: どうなってもいいねん.
 61 Y: hh[hh
 62 M: [hh[hhh.h
 63 I: [hhhh.h
 64 Y: へ:::.

【断片3 (通勤)】

141 Y: (,)へ::: TJNOに↑おるんや:(,)なんか,↑1かい::,
 142 MS課長に聞いたこと>あります:<↑めっちゃ:動物園おんで::みたい!な.
 143 M: へ[:
 144 Y: [信じて(なかつ)て.h
 145 M: [hh
 146 Y: <↑そ↑んな>行かなくてって[::,
 147 M: [hh.[hh
 148 Y: [ほんまでしたね.
 149 I: [hhhhh
 150 S: [ほ:::
 151 T: (課長)も知って¥る¥.hh
 152 M: hhhh三カ月に一回かなくて感じやけど,すごいですよね.
 153 I: hhhh
 154 Y: ふ::ん
 155 T: いや,でもみんなが会社行くのといっしょや hhhh
 156 M: hh[hhh(.)やばい.
 157 Y: [h[hhh
 158 I: [hhhhh
 159 Y: へ:::.

ずほめ手と立場は異なるものの、共通の成員性を利用しジレンマに対処している。参加者は155Tを笑いで受け止めている(156M-158I)。

本稿では、ほめと応答の発話連鎖に表れる成員性を取り上げた。断片1では、ほめの応答では同じ「親」という成員性を利用し、不同意を示していた。断片2では、断片1の成員性が継承されていた。断片3は「親」としてのほめを、「同僚」という異なる成員性を利用し回避を示していた。それは、ほめに同意をすることはできなくとも、「同僚」というカテゴリーの共有する経験を参照し、ほめ手としてのジレンマに対処するふるまいであると考えられる。ほめの受け手は、言語の操作で対象や焦点をずらすだけでなく、共通の成員性を利用する方略を用いていた。又、ほめ手とほめの受け手は、一対の隣接ペアにとどまらず、より拡張された発話連鎖においても物事を一般化するというカテゴリーの持つ特徴を活かして、認識性が同じであることを主張し、認識的調和の形成を指向していた。

参考文献

- Hayano, Kaoru (2011). Claiming epistemic primacy: yo- marked assessments in Japanese. In Stivers, Mondada & Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation*, pp.58-81. Cambridge University Press.
- 張承姫 (2014). 相互行為としてのほめとほめの応答－聞き手の焦点ずらしの応答に注目して－. 社会言語科学, 17(1), 98-113.
- 小玉安恵 (1993). ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観－外見トピックを中心に－. 言語文化と日本語教育, お茶の水大学, 6, 22-35.
- 小玉安恵 (1996). 対談インタビューにおけるほめの機能(1)－会話者の役割とほめの談話における位置という観点から－. 日本語学, 15(5), 59-67.
- 熊取谷哲夫 (1989). 日本語における誉めの表現形式と談話構造. 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究. 広島大学教育学部日本語教育学科, 2, 97-108.
- 串田秀也 (2001). 私は-私は連鎖－経験の「分かち合い」と「共-成員性」をめぐる参加の可視化－. 社会学評論, 52(2), 36-54.
- Pomerantz, Anita (1978). Compliments responses: Notes on the Co-operation of Multiple Constraints. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp. 115-132. New York: Academic Press.
- Pomerantz, Anita (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some Features of Preferred /Dispreferred Turn Shape, In J. M. Atkinson & Heritage J (Eds.), *Structure of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp.57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, Harvey (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology, In David Sudnow (Ed.), *Studies in Social Interaction*. pp.31-73. The Free Press. (北澤裕・西阪仰訳 会話データの利用法－会話分析事始め－, 北澤裕・西阪仰編訳 (1989). 日常性の解剖学－知と会話, マルジェ社, pp. 3-173.)
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis I*, Cambridge University Press.
- Stokoe, Elizabeth (2012). Moving forward with membership categorization analysis: Methods for systematic analysis. *Discourse Studies*, 14(3), 277-30.